

先人の知恵から

33

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

今回はお休みしようかと思ったが、一旦始めてしまうと途中で休んだり辞めたりすることが苦手なので、また書いている。凝りもせず、飽きもせずである。

今回は以下の8つ。

- 鷓鴣深林に巣くうも一枝に過ぎず
- 初心忘るべからず
- 知らぬが仏、見ぬが秘事
- 知る者は博からず
- 人事を尽くして天命を待つ
- 人生山あり谷あり
- 身体髪膚之を父母に受く
- 心頭を滅却すれば火もまた涼し

<鷓鴣深林に巣くうも一枝に過ぎず>

人はその身分・力量に應じ、足ることを知って境遇に満足するのが良いというたとえ。ミソサザイは深い林の中で巣をつくるが、巣に必要なのは一枝だけであるという意から。鷓鴣=ミソサザイ。

出典 莊子

人間というのは欲深いところがある。自分の子どもに対しても、あれもこれも望みをかけ、あれもこれもさせようとする。ちょっとできると、直ぐもっと上を目指すようにプレッシャーをかける。子どもは親に逆らうことも出来ず、ひたすら頑張り、更に頑張り、ついには燃え尽きて引きこもったり、自傷行為に到ったりということさえある。家族の中で、お互いに足ることを知れば、もめることもぐっと減る。欲をかかなければ、もっと平和に

暮らせるのにとと思うときに、この諺を紹介している。

＜初心忘るべからず＞

何事も最初の謙虚な気持ちや真剣な決意を忘れてはならないということ。世阿弥が能楽の修行についていった言葉で、習い始めたころの芸の未熟さや、最初の経験を忘れてはならないという戒め。

この諺は有名で、我々支援者も、子育て中の母親も、誰もが忘れてはならない諺だと思う。

人というのは最初は様々なプラスのイメージを持っているが、時間と共に、疲れと共に、成功だけではなく失敗の体験と共に、それは色あせ、価値も見いだせなくなってしまうことがある。あんなに待ち望んだ赤ちゃんの誕生も、お世話の大変さに、その可愛さも半減し、生まなきゃよかったとまで思ってしまう母親もいる。この仕事をしたいと思って就いたのに、想像していたものと違った、周りの人との関係が大変だから、すっかりその仕事への意欲も夢も失ってしまう人もいる。そうした、意気消沈したり、がっかりしたり、疲れ果てていたりする人たちに、この諺を贈る。最初に一体何を思ったのか、何を考えていたのか、何を期待していたのか、考え直してもらうのだ。初心に帰ってもらえると、見えることも違って来るだろう。

＜知らぬが仏、見ぬが秘事＞

真実は知らないでいる方が、心が穏やかでいられるし、人の隠し事や世の秘伝というものも、実態を知ってしまえば案外つまらなくてがっかりするので見ないでおく方が良いということ。「知らぬが花」も同義。

事実、真実の伝え方には気を使うことが多い。保護者に子どもの発達の問題を伝えるにしても、そのまま「発達障害です」とか「ADHDです」とか、医者ではないので診断する話ではないものの、診断書が出ていてその説明の際に、ストレートに伝えた方が良い人も、そうでない人もいる。

相手に合わせて説明内容も変えて行かねばならない。正直にストレートに伝えた方がすっきりするという人もいる。

最近直ぐ発達検査をしてほしいと言ってくる保護者が増えたが、もし医者の診断で、発達障害と出たら、それに対してどのように対応しようと思っているのか、そこまで覚悟が出来ているのか、そういう話をしないで、ただやみくもに検査をしてしまっただけの良いものかと思うことが増えた。相手が聴きたくない事でも伝えねばならないこともあるが、検査をしなければわからないで過せることもある。知らなくてよいことを敢えて伝える必要があるのかについては検討が必要である。

長生きになってきて、高齢の方が自分の子どもを先に亡くすことも増えた。100歳を超えてなおも元気でいた人が、自分の息子の死を知って一気に食事もとれなくなり亡くなった例を知っている。周囲ではショックを受けるだろうから知らせないでおこうと言いついていたのに、余計なことを知

らせる人がいて、その結果の出来事であった。

秘事も見ない方が良く、美味しい肉料理であっても、その肉がどのようにとられているかを見ていたら食欲も失せるだろう。見た方が良く、見ない方が良く、特に子どもたちに見せた方が良くどうかについて、保護者はしっかり管理監督すべきだろう。最近はタブレットなどで子どもたちが自由に動画を見ている。ガードを掛けていてもすり抜けている。小学校低学年の子が、動画に触発されて性行為のまねごとをしていたと相談が入ることもある。大人がもっと賢くならないといけない。

情報が氾濫し、個人情報もダダ洩れの中、何を伝えるか伝えないか、何を見せるか見せないか、しっかり考えていく時代ではないかと思う。その啓発も兼ねてこの諺を伝えている。

英語では・・・

Ignorance is bliss. (無知は至福である)

<知る者は博からず>

物事を本当に深く知っている人の専門は広くないものである。逆に何でも知っている人の学問は浅いものであるということ。

出典 老子

学者馬鹿という言葉もあるが、何かを極めている人は、そのことについての知識は計り知れない。一方で他の事については全く無知ということがある。知り合いにも、専門分野については素晴らしいが、身なり

は全く構わずボサボサ頭で服にシミがあっても気づかないし、三日位風呂に入らなくても平気という人がいる。何でも極めるということはそういうことなのだろう。

恐竜博士、昆虫博士、折り紙博士等色々な博士級の子も達にも出会って来た。保護者がこうした子どもたちの興味関心の狭さを応援してくれると良いと思って、この諺を紹介する。勉強が何でも出来る子もいるが、それは一握りに過ぎない。むしろ何か得意分野を持てる子は幸せであろう。また、何でも器用にこなす子もいる。それはそれでよいだろう。

一方何も得意分野も無く、勉強もスポーツも苦手、手も不器用という子もいる。それでも、その子は凄く素直だったり、優しかったり、真面目な頑張り屋さんだったりする。良い面をどんどん伸ばしていけば、きっとその方向に突き出た子になるだろう。良い面の無い子はいないのだから。

<人事を尽くして天命を待つ>

人間の能力で出来る限りの事をし、後は静かに天命に任せる事。事の成否は人智を超えたことであり、結果がどう出ても悔いはないという心境のたとえ。

出典 読史管見

やれるだけのことをやったら、後は待つことも大事だが、意外とそれに気づかないことがある。ずっとジタバタして、疲れ切っている人がいると、この諺を紹介する。あれもこれもやった、次は何をすればよいのかと走り続けているのではなく、時には、

結果が出るのを少し待つことも必要である。支援をしている者としても、事の成り行きを少し待っていると変化が起きたり、ニーズが変わったりしてくるものだと知っておくことも大切である。

英語では・・・

Do the likeliest, and God will do the best.

(最も適切なことをすれば、神は最善を施してください)

<人生山あり谷あり>

この諺には二つの意味があるとされる。人生では良い事もあれば悪いこともあるという使われ方が多い。「良い状態はずっとは続かないので浮かれすぎず気を引き締めなさい」という意味と、「ずっと悪いことが続くわけではなく、いずれ良くなっていくからそれまで頑張ろう」という意味合いもある。

昔からこの諺はよく使われている。人は大抵悪いことが続くとずっと悪い中にい続けると思いがちである。そういう人にはずっと悪いことばかりが続くわけではないという意味で使っている。

先日も、小さい時から親から虐待され、親から離れても、ストーカーにあったり、性被害に遭ったりしてきた若い女性のクライアントと話していて、今は結婚し子どももいて、幸せになっているのだが、相変わらず不安を抱えていたので、トラウマ処理をしながら、これからは今までの辛かった

人生の分幸せになろう、今まで谷底だったのだからもう後はのぼるだけとこの諺を伝えた。そのクライアントは、「上ったらまた落ちるのでは」とネガティブなことを言っていたが、その不安を処理して「そこから先も、下がることはあっても又上るし、山あり谷ありが続くと思うが、かつてのどん底まで落ちることはないのでは？」と話したことがあった。ちょくちょく使える諺だと思う。

<心頭を滅却すれば火もまた涼し>

心の持ち方一つで、どのような苦難もしのげるという教え。心の中から雑念を消し去って、無念無想の境地に到れば、火さえも涼しく感じられるということから。単に「心頭滅却」ともいう。心頭=心。心中。滅却=消し去ることの意。

出典 杜荀鶴 - 詩

この諺は自分にも時々使っている。北海道ではそこまで暑いことも無いので、真夏に関東や関西に行くと、暑さに負けてヘロヘロになってしまう。そんな時、自分に言い聞かせながら凌ぐ。十代半ばから茶道をたしなんできたが、お茶の先生が良くおっしゃっていた。「京都のお家元で修業をすれば、それはそれは暑いけど、着物を脱ぐわけには行かないし、着物のためにはなるべく汗をかかないようにしなければならない。これも慣れで、汗もコントロールできるようになるものだ。」と。

自分の感覚をコントロール出来れば穏やかに過ごせるだろう。何事も修行だ。暑い

時に暑いと言えは 10 円罰金などということもかつて東京に住んでいたころは良く言い合っていた。暑い時に暑いというと余計暑く感じると。心を落ち着け、穏やかに保てば、暑さもそれほどには感じないかもしれない。この諺は、自分自身の修行でもあり、こういう諺もあるくらいだから、自分の気持ちをコントロールしてみようという例として伝えている。

出典説明

莊子・・・

中国、戦国時代の思想家。道家思想の中心人物。名は周、字は子休^{あざな しきゅう}。莊子は尊称で「そうじ」ともいう。儒教の思想に反対し、人為を捨てて無為自然に替えることを説いた。老子と合わせて「老莊」という。緒に『莊子』がある。

老子・・・

春秋戦国時代の思想家。道家の祖。姓は李、名は耳、字は聃^{たん}（一説には伯陽）。老子は尊称。周の図書室の書記官だったが、周末の乱世を逃れて西方の関所を通った時、役人に頼まれて『老子道德経（老子）』二巻を著したという。

読史管見・・・

南宋（1127～1279）の儒学者、胡寅^{こいん}（1098～1156）が「歴史を読んでの私見」としてまとめた書物。その中で東晋の謝安^{しゃあん}（320～385）が前奏の符堅^{ふけん}を淝水^{ひすい}で破った時のエピソードに絡めて「人事天命」を使っている。

杜荀鶴・・・846～904年

中国晩唐の詩人。字は彦之^{げんし}、九華山人と号す。池州石埭^{いし}の人で、七言律詩「夏日題悟空上人」の第 3, 4 句「安禅不必須山水（安禅必ずしも山水を須たず） 滅得心中火自涼（心中を滅得すれば火も自ずから涼し）」からの出典である。